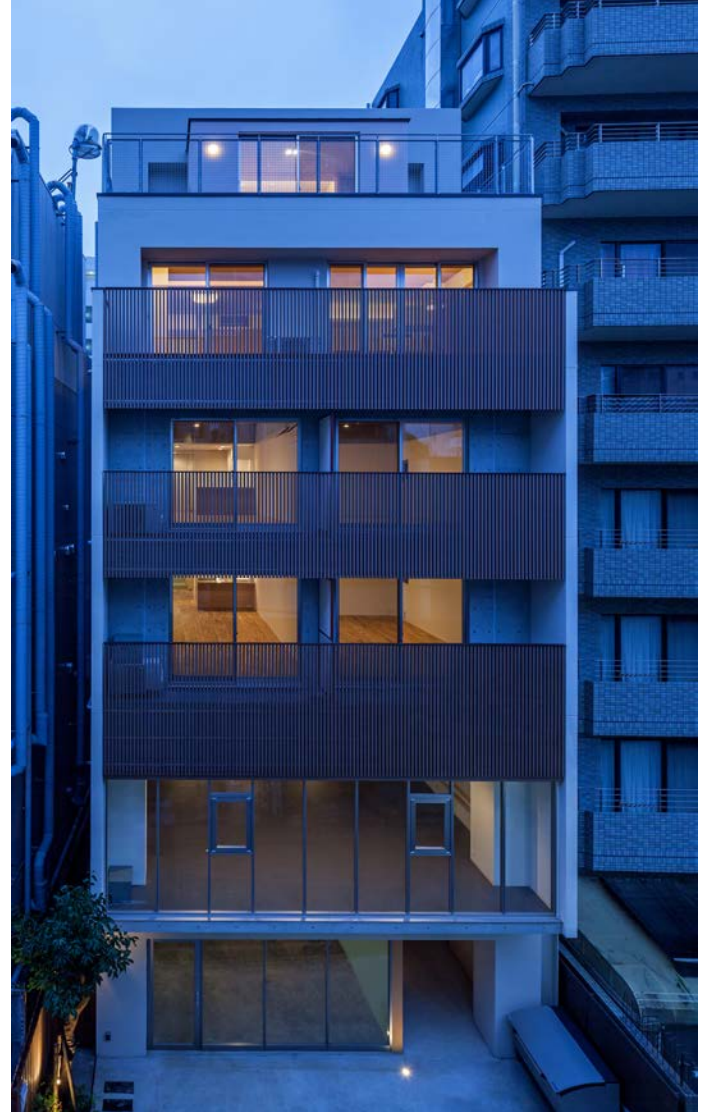


SHIN CLUB 188

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



「A-FLAT」 ©BAUHAUSNEO

フィンランド

写真は、このたび代々木八幡に竣工した集合住宅です。長い間お米屋さんを営んでこられた建て主は、バブル期に、商店街の他の店舗が次々と売却されたり、他の場所へ移転されたりする中、近隣の方たちの「他にはない美味しい精米」を求める声に応じてお店を続けてこられました。しかし、木造の住宅の老朽化も進み、このたびビルを建てられることにしました。設計者のリオタデザインの関本竜太氏は木造の住宅のテイストをRC造の建物の中にも存分に活かし、ご夫妻が暮らしていく新たな空間はとても心地よいものになりました。

今月号の「フロントライン」では、その関本氏が若い頃フィンランドを訪れたときの話を取り上げました。大きな決断を迫られるときに、どうしたらいいのか、これが未来にどんな結果を及ぼすのか、誰もが迷うところです。進路に悩んでいた関本氏は、一大決心でフィンランドに向かいます。そして、設計事務所に職を求めて直談判をしていきます。日本人はとかく周りを気にしすぎる傾向があるようです。空気をよく読めとか、きちんとしたシステムに乗らないとだめだとか、完璧な状態でないと何もできないと考えがちです。しかし、自分の進路は決めたら行動あるのみ、それが結果に繋がっていく。失敗も数多くあることでしょう。でも、学ぶことも多いはず。こちらがワクワクするようなお話を聞かせていただきました。

フィンランドという国は、北欧の遠い国ですが、アニメ「ムーミン」

(トーヴェ・ヤンソン作) やシベリウス作曲の交響詩「フィンランディア」を生み、サウナ発祥の地、サンタクローズの国として、日本人にもなじみのある国です。携帯電話のノキアやLinuxなど、ハイテク産業の先進国であり、早くからインターネットが普及し、その通信速度は世界で最も速いとのこと。高福祉で、教育も最高水準。フィン人が93%、スウェーデン人が6%。公用語はフィンランド語とスウェーデン語で、英語も小学校のときから学ぶため、ほとんど全国民がトリリンガルということです。航空便での所要時間はおよそ9時間半で、「日本から一番近いヨーロッパ」として定期直行便が開設されています。6カ月の間に90日以内の滞在であれば査証や在留許可、就労許可は不要です。歴史的にもヨーロッパの中では親日派と言われ、1度は訪れてみたい国の一つです。

そのフィンランドでも2015年4月には失業率9.4%と、景気は良くないようです。もちろんヨーロッパ全体で難民問題もあり、ほとんどの国が大変な状況になっています。ただフィンランドのような教育水準も高い国では、就業率だけを見るよりも、働き方そのものをお手本にした方がよさそうです。制度の調整は各々あるでしょうが、女性の社会進出が進んでいたり、就業ではなく起業を目指す若者が増えていたり、と個人を大切にしながら働き方、生き方を選んでいるように思われます。四方をいろんな国に囲まれて培われてきた底力が見えます。関本氏のように己を再認識する鏡としてみたいですね。

A-FLAT



以前の家の趣を活かし、建替後も心地よく暮らす

代々木八幡の商店街で、長年お米屋さんを営まれていた建て主は、老朽化が進んだ店舗兼自宅を次世代への継承も視野に入れて、新たに賃貸住宅を加えたビルに建て替えられることにした。

当事務所は戸建木造住宅の設計が多く、「賃貸マンションなどの資産運用面の判断は、専門家の意見を仰いだ方がいい」と企画実績が豊富なタカギプランニングオフィスに協力を依頼した。結果、銀行の選定や返済計画だけでなく、この地域にアピールするには、設計上どんな付加価値を考えるのがいいのか、などいろいろと適切なアドバイスをいただいた。

数年前に比べて建築コストが上昇したこともさることながら、今回、都心の集合住宅の設計は法規制が厳しく、予想以上にプラン、デザインが限られてくることを実感した。しかし、RC造でも木造のようなディテールを持ち、全体に柔らかく、周辺には開かれた印象を持たせたいと考え、バルコニーの手摺に合成木のルーバーを取付けたり、1階の外壁もベージュや茶色の土壁風にしたりして、落ち着いた、親しみやすい雰囲気を作り出している。細長い



敷地のビルにありがちな、奥が陰鬱な空間になることを避けるため、アプローチとなる建物右側の通路には、足元にフロアライトを仕込み、突き当りの外部階段の下に、小さなオブジェを置いて、建て主や居住者にとっての癒し空間になるようにしている。

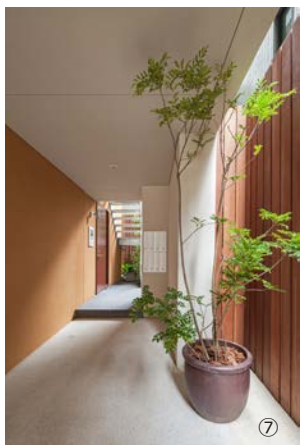
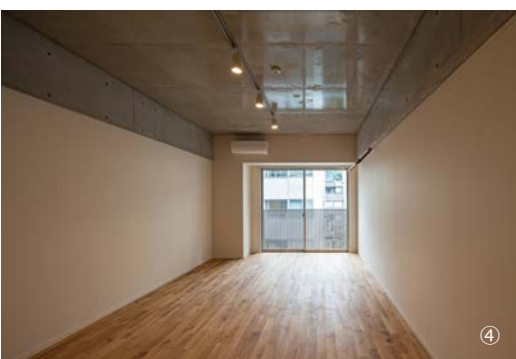
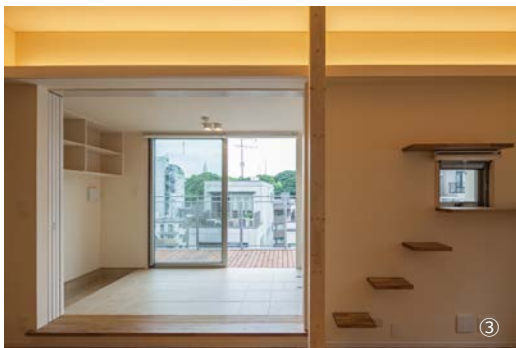
1階はテナント、2階はバレエスタジオ、3、4階は1フロア2戸ずつの賃貸ルームで、5、6階が建て主一家の住宅スペースとなっている。

居住スペースには、なるべく木を使ってほしいとのご希望があった。既存の建物は、お米屋さんの奥に上がり框があり、掘こたつがあって、その背中には、建て主のお父様がいつも米糠で磨いていたというヒノキの柱があった。建て主の愛着のある柱や掘こたつの団楽スペースも新居で再び採用することにした。

高齢に向かう方の住宅設計は、既存プランの骨子は残して、改善すべきは改善する、という方法がいい。既存の家が場所に対して、理にかなった建て方をしているのであれば、精神衛生的にもプランを変える必要がない。よくバリアフリーと言うけれども、全部平らにすれば良いというものでもない。座ってから建ち上がるまでは、結構な労力である。今回も畳のスペースを40cmほど床から高くして小上がりとし、床下収納も設けている。板ぶすまもあって、長女ご一家が泊まりに来て大丈夫である。予算の上から天井に木を貼ることを一端あきらめかけたが、不燃パネルに薄い突板が貼ってある製品（ニッシンイクス）を見つけ、採用した。

建て主の奥様のこだわりは、庭の柿の木であった。嫁がれた時から立っていた木は、ビルの谷間なのに、美味しい実を毎年付けていた。実のなる木の移植はむずかしい。だが、今回は全ての葉を落として別の畑に移植。「冬を越して再び春に芽を出せば大丈夫」と言われ、戻ってきたときには葉を付けていたという感動ストーリーがあった。建物前面に移され、今も道行く人を眺めている。

(関本竜太氏 談)



所在地：渋谷区
 構造：RC造 規模：地上6階
 用途：店舗・バレエスタジオ・共同住宅
 設計：関本竜太/リオタデザイン
 施工担当：小原
 竣工：2015年9月
 撮影：BAUHAUSNEO

①5階。リビングダイニング。左手がキッチン②同じく5階。バルコニーは木製デッキを敷き、室外機の上にはこの後、ガーデニングのための棚を設えた。引戸で開放的な空間③6階。子世帯として独立しており、バルコニーの間にはペットのためのパフアゾーンも設けられている④4階の賃貸スペース。1フロア2戸の構成。片方を大きくとり、いろいろな利用の可能性を広げている⑤2階バレエスタジオ⑥4階賃貸部分のアイランドキッチン⑦1階アプローチ。隣接するビルとの間は板塀。テナント側の壁は赤い土壁風の壁⑧パズパスのようなオブジェを置いて、共用部分に癒し空間を生み出した



関本竜太氏
レイヴィスカ設計の照明がある事務所にて
撮影：アック東京

Ryota Sekimoto



「ミュージルマキ教会」設計：ユハ・レイヴィスカ
写真提供：関本竜太氏

今月は、「A-FLAT」の設計者、リオタデザインの関本竜太氏にお話を伺います。フィンランドでの濃密な時間が、人生の大きな転機となったそうです。

—関本さんのフィンランドとの出会いはどんなことだったのでしょうか？

関本：大学を卒業して最初は棚橋廣夫先生の設計事務所に入りました。5年半ほど在籍し、集合住宅や整形外科、幼稚園などを担当しました。

転機となったのは1999年に新婚旅行として行った北欧旅行です。デンマークやスウェーデンを巡り、フィンランドではアールトの建築を主に見て歩きましたが、結果的に私にとって運命の出会いとなったのは、アールトではなくユハ・レイヴィスカ設計による「ミュージルマキ教会」でした。外観は素朴なのですが、内部空間が大変豊かで、光に包みこまれるような、これまで体験したことのない空間でした。それまでも世界中で様々な建築を見てきましたが、「自分が作りたい建築はこういうものだ」と思えたのは初めてのことでした。

その後帰国した私は、事務所を辞めてフィンランドに渡る決心をしました。そこからの私は、運命の渦に巻き込まれるようにいろんな人に会ってゆくことになりました。人はひとたび腹を括って前に進み始めると、行く先々で色々な人が手をさしのべてくれるものなのです。

例えば知人に相談すると、彼の友人が近々ユハ・レイヴィスカ事務所から帰国するらしいという事実が発覚してその友人を紹介してもらって話を聞いたり、またその友人から別のフィンランド関係者を紹介してもらったり、関係は繋がってゆきました。

そんな中ある建築家から頂いた「日本でいくら策を巡らしていてもだめ。行きたいのなら、行かなくては始まらない」というシンプルな助言が心に響き、一路フィンランドに渡って単身現地での就活をはじめることになりました。

フィンランドでは様々な設計事務所の門を叩きました。ホテルの部屋から電話帳を頼りに、片っ端から設計事務所に電話してゆくのです。もちろん全く相手にされませんでしたが、世界的建築家でもあるミッコ・ヘイッキネン氏（ヘイッキネン&コモネン）が会ってくれることになり、事務所に押しかけたこともありました。

当時のフィンランド建築界は慢性的な不景気で、どこも外国人を雇う余裕などありません。ミッコの事務所も例外ではなく、結局雇ってもらえることはできませんでしたが、別の事務所を紹介してくれたり、日本に行った思い出などを話してくれたり、とても温かな対応をしてくれました。

最後にはユハ・レイヴィスカの事務所にも行きました。ユハの事務所はもっと敷居が高くて、スタッフがなかなか電話を取り次いでくれないのです。でも何度も電話をして時間を作ってもらいました。結果から言うと、事情は同じで雇ってもらえることはできなかったのですが、ここでもまたユハの人情

味溢れる対応に触れることができ、幸福で得がたい経験ができました。

—そこから、どうして留学するということになったのでしょうか？

関本：はい。その就活の旅で、最後に訪れたのが、アールトがキャンパスの設計をしたヘルシンキ工科大学（現アールト大学）でした。そこで日本からの留学生と出会い、キャンパスを案内してもらうことができました。憧れの建築学科棟では留学担当の秘書にも紹介してもらったのですが、軽い挨拶のつもりが、先方は私が留学希望者だと思っただけで、そこでいろいろと留学の説明をしてくれました。

結婚もしていましたし、今さら留学など全く考えていなかったのですが、話を聞いているうちに、留学という選択肢がとても現実的なもののように思えてきました。何より留学をすれば、学生ビザがもらえてフィンランドに長期滞在することができるのです。こちらでの就活にもきっとチャンスが出てくるだろうと考えました。今にして思えば邪な考えですが、当時の私は必死でした。

無事留学を果たし、現地での生活が始まりました。フィンランドでの生活を通して学んだことや、受けた刺激は計り知れません。体に染みこんだ現地の空気感や北欧の人達の建築やデザインに対する考え方は、しっかりと自らの感覚として身についたように思っています。

—そして帰国し、独立されたのですか？

関本：はい。ただ、そう一筋縄には行きませんでした。いつか独立したいとは思っていましたが、当時の私はフィンランドでの生活が充実していたので、このままフィンランドに残っても良いとも思っていました。ところが、留学して次第に気づかされたのは、奇しくも遠く離れた日本という国の素晴らしさでした。

向こうの建築家や学生達は、私が日本から来たという目を輝かせているような質問をぶつけてきます。向こうでも日本の建築家は大変人気があり、それに加えて日本文化に対する興味もまたびっくりするくらいあるんです。我々は島国で、どちらかというと欧米に対して引け目を感じることも多い。しかし、特にヨーロッパの人達にとって日本という国はとても特別で尊敬に値する国なのだと気づかされました。

そして建築実務のレベルに関しても、所員時代は決して胸を張れるようなスキルは自分にはないと思えていましたが、日本のアトリエで鍛えられた図面能力は思っていた以上に、どこに行っても通用するレベルなのということにも気づかされました。模型に至っては、日本では若いスタッフが涼しい顔でスタディ模型を作りますが、あのような精度やスピード、細やかさで模型を作る国などどこにもありません。現地では私が模型を作っていると黒山の人だかりができるほどでした。

私はフィンランドに骨を埋めるよりも、日本の厳しい競争社会の中に再び身を置いてみたくなりました。自信が付いたのだと思います。それはフィンランドで得たものというよりは、もともと自分が持っていたものに改めて気づかされたという方が近いかもしれません。

「行きたいのなら行けばいい」、そう助言を下さった方に感謝しています。何事も、自分が信じた道を進むことが大切です。自分が覚悟を決めれば、周りが変わってゆく。そういうことを、私はフィンランドから学んだような気がします。

—本日は、どうもありがとうございました

関本 竜太

1971年 埼玉県生まれ
1994年 日本大学理工学部建築学科 卒業
1994年～99年 エーディーネットワーク建築研究所
2000年～01年 フィンランド アールト大学留学
2001年 現地の設計事務所プロジェクトに関わる
2001年12月 日本帰国
2002年2月 一級建築士事務所リオタデザイン 設立
2007年1月 株式会社リオタデザイン 代表取締役
2008～14年 日本大学理工学部非常勤講師

「社内講演会『都市のエージェントはだれなのか』～北山恒氏をお迎えして」

10月3日

10月の社内全体勉強会は、横浜国立大学大学院 Y-GSA (Yokohama Graduate School of Architecture) 教授、北山恒先生をお迎えしました。

2010年に、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「トウキョウ・メタボライジング」のコミッショナーとして展示を担当された北山先生。その時の考察を下に、パリ、ニューヨークなど世界の都市の成り立ちを比較し、東京オリンピックを前

に建設ブームとなっている今、東京に求められているのはどんな建物なのかを語られました。

2時間という短い時間ではありましたが、都心で中・小規模建築の施工を手がける施工会社として、大きなうねりの中で自分たちの仕事の意味を改めて考えさせていただく機会となりました。



北山恒氏

＜パリとニューヨーク＞

パリは、1853年から70年までのたかだか17年間で一気に作られたことはあまり知られていません。大通りと広場の「スタープラン」は、当時王政に反対する市民の暴動が多く、見通しをきかせるために、行政官オスマンが考えたものでした。通りに対して連続した建物の壁は、その外側をパブリック、内側をプライベートとする概念を生み出しました。

そして、ニューヨーク。こちらでも1900年からわずか30年程でたくさんのビルが作られました。1871年のシカゴ大火から始まった「現代都市」は、それまで都心を作っていた広場や教会や行政機関の代わりに、オフィスビルという新しい建築物を中心としており、ニューヨークでさらにマンハッタン・グリッドという経済資本的なゾーニング法で資本家がビルを建てやすいシステムを生み出しました。その後、世界の主流となるモダニズム建築、グローバリズムに繋がる動きです。

＜東京の近代化＞

江戸時代すでに大都市だった東京。関東大震災の前年に撮られた江戸の街並みの写真を見ると、低い瓦屋根の家が続き、豊かな庭木が間を埋める庭園都市の様相を呈しています。武家屋敷はだいたい100坪が基本で、町人は街路に面した店構えを立派なものにしたいと言われていました。

しかし、1923年の関東大震災で過半が消失。再生しますが、1945年第二次世界大戦の東京大空襲で再び壊滅的な被害を受けます。そして1950年代からの高度経済成長期でスクラップアンドビルドにより、面白いように建物が作られ始めました。都心にはアメリカ同様、オフィスビル

が建ち並ぶようになります。

その折、戦前「東京緑地計画」として制定され、戦時中防空空地として指定された「環状緑地帯」にインフラ整備がされないまま、仮設に多くの住宅が建設され、また山の手地区にも不良住宅が建てられました。それらが、現在の木造密集市街地となっています。政府は幹線道路や学校、公園などを整備したほかは、住宅は自力の再生に任せていたために、それらは全て合わせるで7000ha以上にもなってしまう、建替えもままならず、予想される地震などの災害、それに続く火災の発生が問題になっています。

そこでY-SGAでは「1番密集しているところを不燃化すると町全体が不燃化する」という実験に取り組んでいます。上手に工事すると4階建くらいが建てられるので、小規模集合住宅に建替えやすいように法整備を整えてほしいという働きかけを行っています。建物も、お互いが見えるような、人と人のつながりを新たに生むようなコンセプトでプランをつくります。以前、辰の施工で、廊下部分を透明なガラスにして、互いの顔が見えるという複合ビルを三宿に作りました。先足でつくった集合住宅（他社施工）では、居住者の視線を検討しながら、建具を障子のように移動させる仕掛けを作り、建築学会賞をいただきました。

大規模再開発でなく、中・小規模で建物を作っていく技術の習得が今後の建設業界には必要です。小さな敷地で設計も様々ですが、このようなマーケットは急激に進む可能性があります。空き家になり、その不動産を相続した人も扱い方がわからない。そんなときにこういう解答がある、と示す仕事—これをどうこなしていくかが、2020年以後の本物の街づくりの戦略となることでしょう。（以後、省略させていただきました）



①講義を熱心に受ける参加者たち



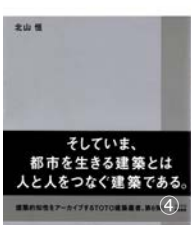
②弊社施工の「集合住宅20K」では、都心に大きな空地を生み出した



③同じく弊社施工「クラールハイツ三宿I」。人と人をつなぐガラス張りの住宅

都市のエージェントはだれなのか

著者：北山 恒、パトリック・ニューボーン 著



④北山先生が8月上梓された、『都市のエージェントはだれなのか』（TOTO建築叢書6）今回の講演内容をさらに詳しく知りたい方はぜひ参考にさせていただきます

「『リジェンティス』が2015グッドデザイン賞受賞」

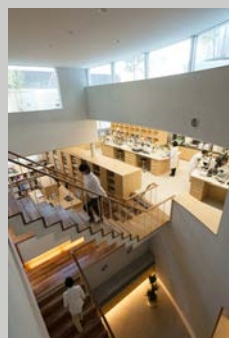
10月30日～11月4日（受賞展開催）

昨年施工させていただいた「リジェンティス」が2015グッドデザイン賞を受賞しました。（shinclub181掲載）。受賞理由は「緩やかな



設計の木名瀬佳世氏。現在、和歌山、茨城でもお仕事を展開中です

曲面を描く内部空間に優しいヒューマンスケールを持った吹き抜け空間が広がり、企業姿勢が感じられる好感度の高いデザインとなっている。上階に来賓施設をおき、研究所自体をお迎え空間としているところが面白い」とのこと。この賞は、「社会のさまざまな課題を解決するために、デザインは何ができるか」がテーマです。受賞は、施工の弊社にも励みとなりました。



構造：RC造 規模：地上3階
用途：事務所・クリンルーム
設計：木名瀬佳世
竣工：2014年12月
撮影：傍島利浩

編集後記

・またもや建設業界の信頼をゆるがす事件が起きてしまいました。杭工事のデータ偽装は、一社にとどまらない、全体の問題としてとらえなくてはならないでしょう。地面の中は開けてみなくてはわからないことも多くあり、図面だけで済まないこともたくさんおきますが、その後の姿勢が問われているのだと思います。